

平成30年度かながわの遺跡展

潮風と砂の考古学

神奈川県教育委員会
平塚市博物館
神奈川県立歴史博物館

例 言

- ◆本冊子は平成30年度かながわの遺跡展『潮風と砂の考古学』の展示図録です。
- ◆本展は、神奈川県教育委員会・平塚市博物館・神奈川県立歴史博物館が共同で主催するものです。
- ◆展示会場と会期は次のとおりです。

【平塚会場】平塚市博物館

平成30年12月1日(土)～平成31年1月6日(日)

〔休館日は毎週月曜日(12月24日は開館)、年末年始(12月29日～1月3日)〕

【横浜会場】神奈川県立歴史博物館

平成31年1月19日(土)～平成31年2月17日(日)

〔休館日は毎週月曜日(2月11日は開館)、1月29日、2月12日〕

- ◆会期中、講演会を次のとおり行います。

第1回(平塚市博物館講堂) 平成30年12月8日(土) 東京大学総合文化研究科特任研究員 杉山浩平 氏

第2回(神奈川県立歴史博物館講堂) 平成31年1月20日(日) 浄光明寺執事・什宝物調査整理係 古田士俊一 氏

第3回(神奈川県立歴史博物館講堂) 平成31年2月11日(月・祝) 東京文化財研究所音声映像記録研究室長 石村智 氏

- ◆本冊子に掲載した出土品の所蔵・保管先のうち、県教育委員会が所蔵するものについてはその旨の記載を略しています。
- ◆本展の企画・図録の作成は、平塚市博物館(担当 栗山雄揮)、神奈川県立歴史博物館(担当 丹治雄一)の協力を得て、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)の久我谷深太が行いました。

神奈川県域の砂丘・砂嘴の分布と本展で取り上げた遺跡の位置

※砂丘・砂嘴の分布範囲については、国土交通省国土地理院が作成しインターネット上で公開している『ベクトルタイル「地形分類」』に準拠した。なお平塚～藤沢市域と鎌倉市域については、砂丘間凹地と砂丘の周囲の氾濫平野等も一部含めている。



砂の上に消えず残された、その足跡をたどってみます。

最終氷期に終わりをもたらした気候の温暖化は、地球を覆っていた氷床や氷河を解かし、これに伴って海面は高く押し上げられ、海岸線は徐々に陸地の奥へと進んでいきました。

日本列島では、縄文時代早期末から前期(今からおおよそ7000年前頃)にかけての時期に、海面が最も高い状態が続いていたと考えられています。これにより海岸線の変動が急速に緩まったことで、河川が内陸部から運んできた土砂が沿岸部に安定的に堆積するようになり、そこに「あらたな土地」が現れはじめました。縄文時代中期に海岸線が後退に転じてからは、「あらたな土地」はそれまで海の底にあった場所にも次第に広がっていきました。

本展示で取り上げる「砂丘」や「砂嘴」に残された遺跡は、この「あらたな土地」に立った人々の足跡です。人々はそこでどんな営みを繰り広げてきたのでしょうか。

小田原
小田原城(総構)
小田原台場

湯河原
竹の花

目次

I
砂の遺跡の
あれ・これ・それ 1

II
湘南砂丘に
生きる！ 4

III
海の港・川の港
..... 9

IV
港都・鎌倉
19.....

V
むすんで
ひらいて
24.....



序・あしたはまべをさまよえば

人々が集い楽しむ湘南の海岸。
歴史深い鎌倉の街の一边を縁取る浜辺。
開国以来の世界への玄関口、横浜港。
神奈川県海辺にあるそんな風景のうしろには、
潮風と海がつくった砂の土地が埋もれています。

I

砂の遺跡の あれ・これ・それ

ようこそ《潮風と砂の考古学》へ!!

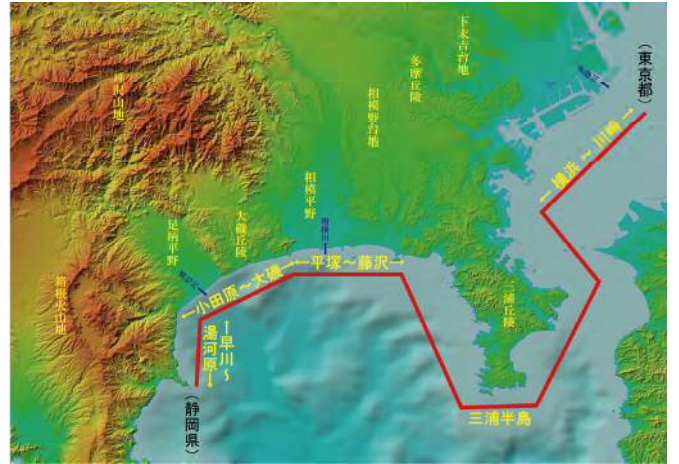
この展示では、沿岸部にできた砂の地形、「砂丘」「砂嘴」につくられた遺跡に注目します。

さて、そもそもこの地形、どのようにしてできた、どんな土地なのでしょう?そこにつくられた遺跡にはどんな特徴があるのでしょうか?

まずは本展示を楽しむための“基礎知識”を確認してみましょう!

① 海のかたち—神奈川県域の海岸地形—

神奈川県の海岸線の総延長距離は約 430 km。他の都道府県と比べて決して長くはありません。しかし、そこに現れた地形は様々な表情をみせています。



平塚 ⇄ 藤沢

相模川が押し出した砂が海の流れによって運ばれて堆積した砂浜海岸です。数千年にもわたる砂の堆積は南北の幅が約 3 km にも及ぶ「湘南砂丘地帯」を作りあげました。



小田原 ⇄ 大磯

扇状地から流れ出る酒匂川によって運ばれた礫(直径 2 mm 以上の小石)が堆積した、礫浜海岸が認められます。



横浜 ⇄ 川崎

幕末の横浜開港に伴う港湾施設の整備と近代以降の工業地帯の形成を背景に埋立が進み、人工海岸化しています。



湯河原 ⇄ 早川

足柄平野の南辺を流れる早川の下流域よりも南側の海岸は箱根火山の外側にあたり、火山岩による岩石地形が連なります。



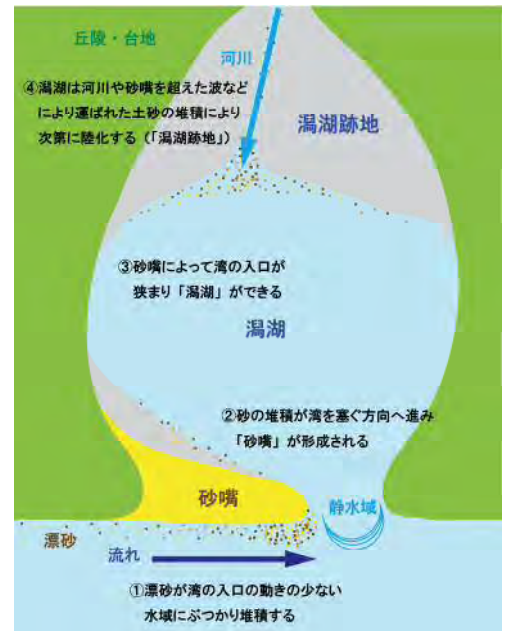
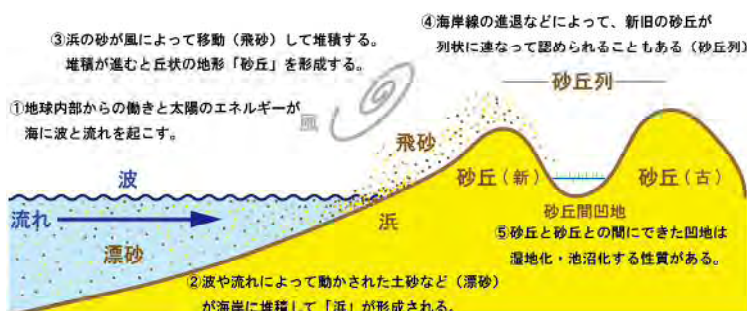
三浦半島

大きな川が少ないため、沿岸部にあまり砂が堆積しません。そのため、丘陵が海岸線近くまで迫るような地形が展開しています。

② 海と風がつくる砂の土地

砂丘は、風の力により砂が丘状に堆積した地形です。沿岸部に形成された砂丘を特に海岸砂丘と呼び、砂の堆積が著しい浜の背後などで発達します。

湾の入口を塞ぐように細長く砂が堆積した地形が砂嘴です。湾の内部は砂嘴により外海と切り離されることで次第に湖沼化し、潟湖を形成します。



③ 砂の遺跡の津々浜々

砂丘・砂嘴は出来あがり方こそ台地や丘陵とは異なりますが、すごく特別で特殊な土地、という訳ではありません。では、この展示ではどんなところに注目して遺跡を観ていくのでしょうか。その視点を得るためのヒントを、列島各地の調査研究事例から探ってみます。



砂丘や砂嘴は水や波による影響を受けやすい沿岸部の低地のなかでは、比較的標高の高い土地です。このため住む場所として選ばれることがあり、海を間近に臨むムラやマチの痕跡が列島各地で確認されています。

◀オホーツク海沿岸にある砂丘上の集落遺跡、常呂堅穴群（北海道北見市）。残雪のひとつひとつが埋まりきらずに窪みとして残る堅穴遺構（住居跡）（東京大学常呂実習施設）。



海辺にあるという立地の特性を存分に活かした生業・産業の存在も見出せます。漁労具の出土はもちろん、遺構を伴わないキャンプ地のような遺跡や、工場・工房の跡、貿易の拠点地とみられる遺跡なども認められます。

◀砂嘴上で操業していた古墳時代の製塩遺跡、沖の原砂丘遺跡（熊本県天草市）の製塩炉の想定復元模型（天草市五和歴史民俗資料館）。



埋葬地として利用された事例も数多く確認されます。その背景には、生活空間に制限のある沿岸域での土地利用の問題、政治的な意図、あるいは海に対する観念的な意識などがあると考えられています。

◀弥生時代末から古墳時代にかけての砂丘上の墓地遺跡である広田遺跡（鹿児島県南種子町）の埋葬遺構（南種子町教育委員会）。

何らかの宗教的な儀礼の痕跡とみられる遺構や、祭祀に用いたと考えられる道具類もしばしば認められます。しかし「まつりのあと」から携わった人々の心の中までをも明らかにすることは、容易ではありません。

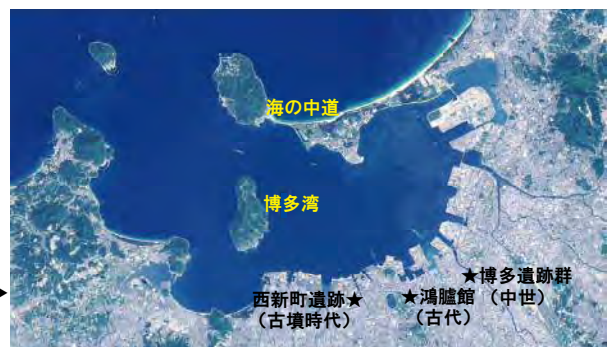


砂丘上の古代の祭祀遺跡である寺家遺跡（石川県羽咋市）から出土した青銅製祭祀遺物（羽咋市歴史民俗資料館・石川県埋蔵文化財センター）。



砂嘴は天然の防波堤として機能します。そのため砂嘴で閉じられた湾や潟湖には港が開かれることがあり、漁業や交易の拠点となりました。陸化などの地形変動により役割を果たせなくなった港も、各地の海岸に人知れず埋まれています。

砂嘴である海の中道に護られた博多湾。湾の奥の砂丘地帯には各時代の交易拠点（★）が存在する。



④ 砂に埋もれた遺跡を探せ！



▲国道129号線拡幅工事に伴う発掘調査の作業風景（平塚市教育委員会）



▲茅ヶ崎市文化資料館特別展『湘南の低地遺跡—その形成と発達—』（1996年）の図録表紙（茅ヶ崎市教育委員会）

地中深く埋もれている砂丘や砂嘴の上の遺跡。ではなぜ今日のように、そのどこに遺跡があるのかを知ることができているのでしょうか。

下図の●は、1966年発行の遺跡分布地図に示された、その時まで湘南砂丘地帯上で確認されていた遺跡の位置です。これらの遺跡の多くは、土採りや開墾によって偶然遺物が現れ、幸運にしてその事実が報告されたものです。遺跡数の少なさに加え、砂丘地帯のような低地は地盤の弱さや水害への恐れから土地利用が進んでいなかったとする見方もあり、この当時は砂丘地帯の遺跡に関心がもたれることはほとんどありませんでした。

遺跡を厚く覆う砂を洗い流し始めたのは開発の波でした。

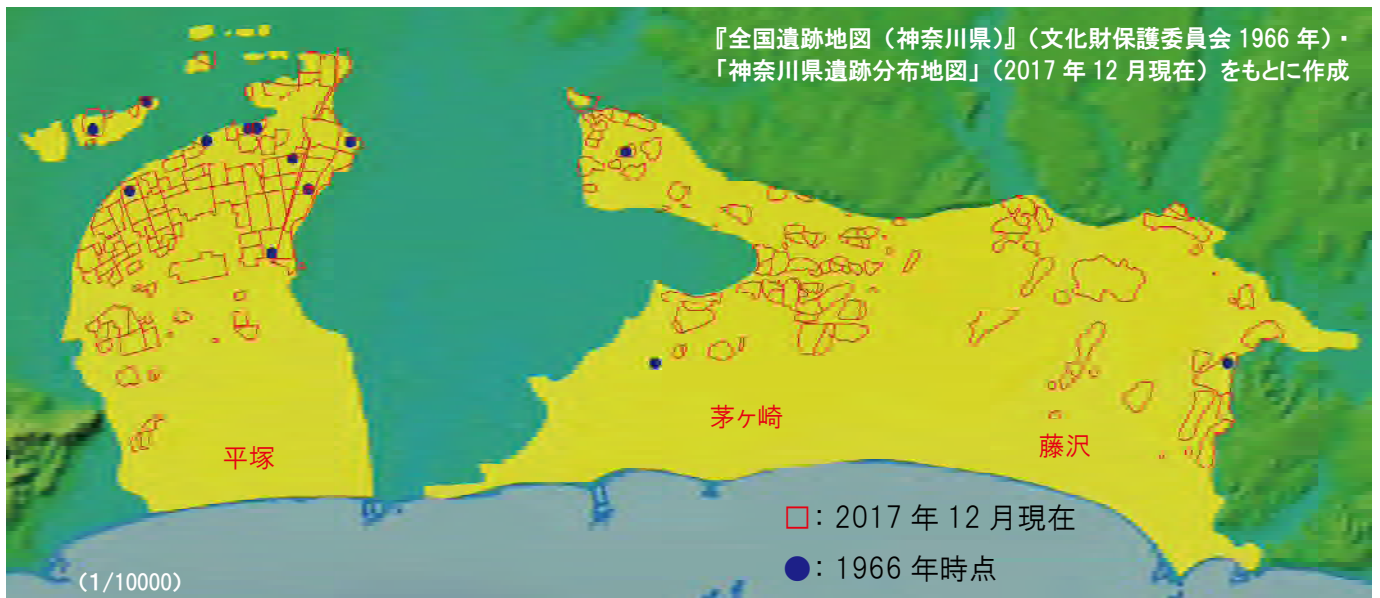
平塚市では、1973・1974年に博物館建設準備室による市域の全面的な分布調査（踏査により地表に現れた遺物の散布状況を確認する調査）が行われました。その結果、開発を受けた砂丘上の土地でも多くの地点で遺物の散布が認められ、一帯に広く遺跡が分布していることが初めて明らかとなりました。その後1979年からは国道129号線の拡幅工事に伴う大規模な発掘調査が行われた結果、相模川右岸の砂丘地帯に古代の遺跡が濃密に残存していることがわかり、のちに一帯が相模国府の跡地として比定される基礎資料が示されることとなりました。

1978・1979年には茅ヶ崎市でも市内全域を対象とする分布調査が行われ、市域の西半部に広がる自然堤防地帯とともに、砂丘上でも数多くの遺跡が発見されました。1996年にはこれら市内低地部の遺跡を軸に、湘南地域一帯に認められる低地遺跡をテーマとした展示『湘南の低地遺跡—その形成と発達—』（会場：茅ヶ崎市文化資料館）とシンポジウムも催されました。

藤沢市では、民間団体である湘南考古学同好会の有志により分布調査が行われています。踏査は16年間に計17回にわたって実施され、調査結果に基づいて多くの地点が新発見の遺跡として掲載されました。

1966年から約半世紀を経た現在、下図の赤い囲みの分布が示しているように、湘南砂丘地帯では非常に数多くの遺跡が存在していることが明らかとなっています。

現在取り組まれている砂丘・砂嘴の上につくられた遺跡に関する調査研究や、埋蔵文化財に対する行政的な取り扱いの判断や対応、そしてもちろんこの展示も、このような先学たちによる地道な努力が基礎にあるのです。



『全国遺跡地図（神奈川県）』（文化財保護委員会1966年）・「神奈川県遺跡分布地図」（2017年12月現在）をもとに作成

▲湘南砂丘地帯の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の分布

II

湘南砂丘に 生きる！

湘南砂丘地帯で遺跡の形成が始まるのは、今から約 6000 年前の縄文時代前期のことです。しかし集落の出現、すなわち住む場所として利用され始めるのは、弥生時代中期になるまで待たなくてはなりません。

本章では、砂丘地帯での定住に至るまでの人々の活動と、弥生時代の砂丘地帯での生活の様子を地形の変化と比較しながらみていきます。

① 砂丘地帯へ、最初の一步

現在藤沢市庁舎が建つあたりには、かつて“若尾山”と呼ばれていた砂丘の高まりが存在していました。ここから出土した縄文時代前期中頃の土器（黒浜式）は、湘南砂丘地帯で確認できる最古段階の遺物です。

右図は海進が最も進んでいたころの若尾山周辺の地形想定復元図です。若尾山があった場所の下では砂嘴の形成が始まっています。黒浜式のころには海岸線は後退を始めており、離水した砂嘴の上では砂丘の形成が進んでいたようです。その後も若尾山遺跡では前期後半の土器が認められるとともに、若尾山の南側に位置する片瀬丘陵周辺でも、砂丘上の大源太遺跡や谷戸内の低地にある川名森久遺跡で同時期の土器が出土しています。このように若尾山周辺では縄文時代前期段階には人々が何らかの活動を行っていたことが認められますが、土器の他には同時期に位置づけられるような遺物や遺構が確認できません。当時の人々はいったいこの場所で何をしていたのでしょうか。

右図をもう一度見てみると、若尾山は海退後に境川と粕尾川の河口となる入江に挟まれていることがわかります。境川右岸の台地上にある立石遺跡は、出土遺物の様相から湾内で網漁を行っていたことが想定されていますが、河口部に棲息するヤマトシジミも一定量検出されています。若尾山周辺は台地上に住む人々が、河口部での採集活動の際に短期的な拠点として利用された土地である可能性があります。

同じころ高座丘陵の南西端部では、南北ふたつの湾に挟まれた半島の岬に、黒浜式期の貝塚を伴う集落遺跡である西方遺跡（茅ヶ崎市）が出現します。貝塚から出土した魚骨は外洋性のものが多く認められますが、貝類はヤマトシジミが主体であり、河口部にも日常的な生業の場を持っていたことがわかります。

その場所として想定されるのが、岬の南側の裾に伸びる砂嘴です。西方遺跡の南西側にある七堂伽藍跡の発掘調査で確認された黒浜式土器は、砂嘴を形成する砂層のなかから出土しています。前期後半には、七堂伽藍跡の南側にある北B遺跡でも土器片の出土が確認されるようになり、その後も一帯では集落の周囲に広がる身近な自然環境を利用した生活が続けられていたようです。



▲黒浜式土器〔若尾山遺跡〕
（藤沢市郷土歴史課）
高さ 32 cm



▲最海進期ごろの若尾山遺跡周辺の地形想定復元図
（上本・浅野 1998 をもとに作成）



▲最海進期ごろの西方遺跡周辺の地形想定復元図
（上本・浅野 1999 をもとに作成）

② 浜辺に灯るキャンプの火

縄文時代中期になると、砂丘上の遺跡にも遺構が認められるようになります。これらのなかには、漁労活動に際しての一時的な滞在地点として残されたものもあるようです。このころの海岸線は気候の寒冷化によって後退がさらに進み、それまで湾の底であった場所も陸地化が進んでいました。

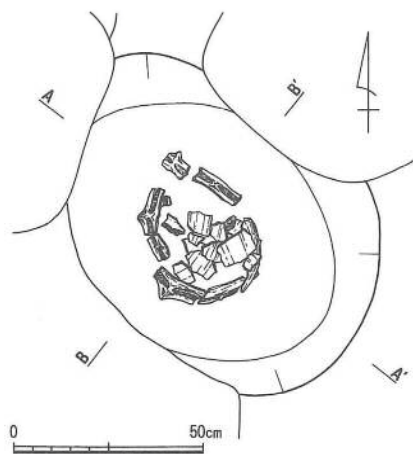
北B遺跡（茅ヶ崎市）で確認された中期初頭の五領ヶ台式期の集石土坑群は、湘南砂丘地帯では最も早くに出現した遺構群です。計20基が狭い範囲内に密集して構築されており、いずれの土坑からも熱や火を受けた礫がまとまって検出されていることから、火を用いた調理施設と考えられています。

北B遺跡の南側にある中通C遺跡では、中期中葉の勝坂式期の集石土坑が3基確認されました。このうちの1号土坑からは、礫石錘・凹石・石皿のほか石棒の破片とみられる石製品が被熱した礫群に混ざって出土しており、何らかの儀礼祭祀に伴う遺構である可能性もあります。

若尾山遺跡でも集石土坑1基が確認されています。礫には被熱したものやススが付着したのがあり、当遺構もまた礫による調理施設と考えられます。近くには調理に用いる礫を貯めたとみられる箇所があり、その中に礫石錘が混入していたほか、包含層中からは勝坂式の土器片を用いた土器片錘が出土しています。ともに網の重りである可能性があり、遺構の構築と漁労活動との関係性が示唆されます。



▲(左・中) 土器片錘・(右) 礫石錘〔若尾山遺跡〕
(藤沢市郷土歴史課)



▲構之内遺跡1号土坑
(『構之内遺跡』)

▼土坑から出土した北屋敷式土器
(東海地方からの搬入品)〔構之内遺跡〕(平塚市教育委員会) 高さ26cm



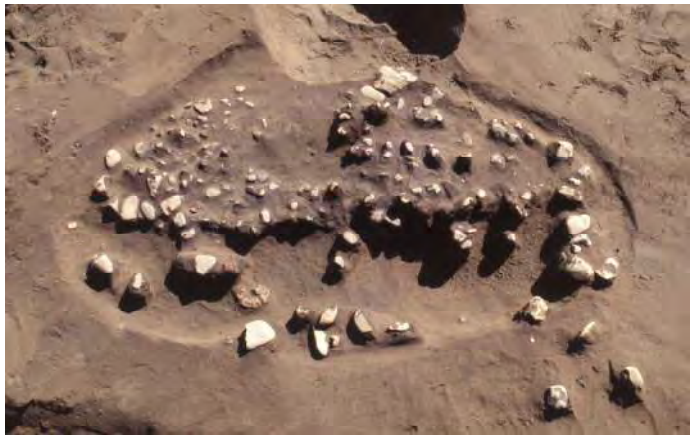
縄文土器出土状況〔諏訪前A遺跡〕(平塚市教育委員会)▶



▲集石土坑〔北B遺跡〕(茅ヶ崎市教育委員会)



▲集石土坑〔中通C遺跡〕(茅ヶ崎市教育委員会)



▲集石土坑〔若尾山遺跡〕(藤沢市郷土歴史課)

構之内遺跡（平塚市）では、土坑の底部から口縁部を下にして潰れた状態で深鉢形土器が出土しました。検出状況から土坑墓である可能性が指摘されています。同様の事例は北東にある諏訪前A遺跡でも確認されています。



平塚市域に広がる砂丘は、計 12 列の砂丘・砂嘴列を数えることができ、構之内遺跡と諏訪前 A 遺跡で逆さに埋められた縄文土器が確認された地点は、内陸側から数えて 3 列目の砂丘列上に位置しています。

奈良時代になると第 3 列と南側の第 4 列をまたぐようにして、相模国府が造営されます。そのため、国府域とその周辺で行われる発掘調査では、古代の遺構が濃密に検出されますが、遺物包含層や時には遺構の覆土に混ざって縄文時代中期の遺物も発見されます。なかには土器片錘や礫石錘も認められます。古代の開発により実態は不鮮明になってはいますが、当地域もまた漁労活動との関わりが疑われます。

③ 遠のく海への足

縄文時代後期には列島規模での遺跡数の減少が認められています。これは湘南砂丘地帯でも同様です。その要因として、従来より気候の寒冷化がより進行したことによる、生活環境の変化が指摘されています。この見方に従えば、海の世界にも何らかの変化が生じ、それに伴って漁労活動も低調化したのかもしれない。



▲堀之内式土器〔北B遺跡〕
(茅ヶ崎市教育委員会)



▲相模国府域周辺で確認された縄文時代中期の遺物出土地点 (●)

④ 拡がる砂原

縄文時代晩期の関東地方では、遺跡の数が後期よりもさらに減少する傾向があります。しかし不思議なことに、湘南砂丘地帯では遺跡数にほとんど変化はありません。さらには石神遺跡(茅ヶ崎市)の出現によって遺跡の分布範囲はより海側へと拡がっており、新たに陸化した土地へ人々が進出していった様子がうかがえます。

この石神遺跡では晩期末から弥生時代前期に位置づけられる土坑が 3 基確認されたほか、同時期のものとみられる石器(石鏃・削器・^{いしがみ} 敲石・磨石)も出土しています。土坑の周辺からは火を受けたイノシシの骨片も検出されており、砂丘地帯においても陸上動物を対象とした狩猟活動が行われていた可能性があります。このほかにも狩猟活動が行われていた痕跡として、「飛行機鏃」とも呼ばれる特徴的な形態をもった晩期に特有の石鏃が、石神遺跡の北にある本村居村 B 遺跡のほか、若尾山遺跡と大源太遺跡でも出土しています。



▲大洞 C1 式系土器〔大源太遺跡〕(青山学院大学考古学研究室)



▲飛行機鏃〔本村居村 B 遺跡・若尾山遺跡・大源太遺跡〕
(茅ヶ崎市教育委員会・藤沢市郷土歴史課・青山学院大学考古学研究室)



▲縄文時代晩期から弥生時代前期頃の石神遺跡周辺の地形想定復元図
(上本・浅野 1999 をもとに作成)

⑤ 静寂の浜辺

弥生時代前期から中期前半までの間、湘南砂丘地帯では新町遺跡（平塚市）で出土した中期初頭の土器片以外に、人々の活動の痕跡が見いだせなくなりました。この土器は丹沢山麓を中心に分布する堂山式で、ごくまれに台地・丘陵上に生活する人々が、眼下の砂丘地帯を訪れていたことがわかりますが、その目的を図り知ることはできません。



▲堂山式土器〔新町遺跡〕
(平塚市教育委員会) 9 cm

⑥ 湘南砂丘民の誕生

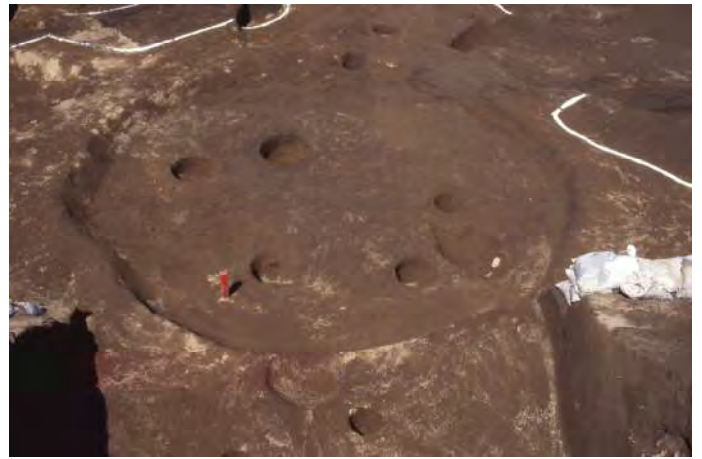
弥生時代中期後半になると、湘南砂丘地帯は訪れる場所から住む場所へとついに姿を変えます。このころ沖積低地を伴う河川流域に集落が造られる現象が関東地方一円で認められています。湘南砂丘地帯での集落の出現もこれと連動するものと考えられます。

若尾山遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が3軒確認されています。右図のとおり当時の若尾山の北側には、境川によって形成された自然堤防と砂丘との間に湿地帯が広がっていたと考えられています。考古学的には証明されていませんが、若尾山に住む人々が水田として利用していた土地である可能性があります。なお、典型的な磨製石包丁が認められない神奈川県域では、削器が石製の穂摘具としての機能を果たしていたと推測されており、若尾山遺跡でも後期を含めて計15点が出土しています。また第22号住居跡からは、土器（甕・壺）とともに大型の磨製石斧破片1点と小型品2点、砥石2点が出土しました。大型の磨製石斧で伐採した木材を小型石斧で農耕具などの製品に加工し、砥石で整形（あるいは石斧を調整）していた様子が想像されます。

稲作集落としての性格がうかがわれる一方で、礫石錘や、特定の大型海棲魚類用との見方もある有頭石錘・有孔石錘も認められ、漁網を用いた漁労活動も併せて行われていたことがわかります。また、海だけではなく、眼下の境川や水田に生息する魚類を対象とした漁労も行われていたかもしれません。



▲弥生時代中期から古墳時代前期ごろの若尾山遺跡
周辺の地形想定復元図（上本・浅野 1998 をもとに作成）



▲竪穴住居跡〔若尾山遺跡〕(藤沢市郷土歴史課)

◀▼若尾山遺跡出土の弥生時代石器 (藤沢市郷土歴史課)



削器

削器



砥石

砥石

磨製石斧

礫石錘

有孔石錘

有頭石錘

4軒の竪穴住居跡が確認された大原遺跡（平塚市）では、砂丘間凹地から平安時代の水田跡が検出されています。遺構としては確認できていないものの、このような土地利用のあり方は弥生時代にまで遡るかもしれません。南原B遺跡（平塚市）の1号土壇内からは、磨製石剣や磨製石斧・管玉などとともに、焼けたイノシシ類下顎骨などの獣骨が検出されています。稲作農耕とともに、それに関わる儀礼祭祀もまた湘南砂丘地帯へと持ち込まれたのでしょうか。なお大原遺跡のSI03竪穴住居跡からは、屋根のような形をした赤く塗られた土器が出土しています。祭祀遺物である可能性もありますが、池子遺跡群（逗子市）で出土した木製の槽に似た形の製品があり、さらなる検討を要します。



（『大原遺跡Ⅲ』）

大原遺跡

池子遺跡群

▲異形土器〔大原遺跡〕と木製槽〔池子遺跡群〕
（平塚市教育委員会・逗子市教育委員会：県指定文化財）



▲方形周溝墓〔若尾山遺跡〕（藤沢市郷土歴史課）



▲1号土壇獣骨検出状況〔南原B遺跡〕（平塚市教育委員会）

若尾山遺跡の居住域は、短い間に方形周溝墓群の広がる墓域へと転換してしまいます。方形周溝墓はいずれも埋葬部は失われていたものの、溝からは多量の土器が出土しています。特に1号方形周溝墓のものは周辺の遺跡で確認されている弥生時代中期後半代の土器のなかでも、古手の様相を示しています。このほかにも、2号方形周溝墓出土の口縁部と胴部を意図的に打ち欠かれたとみられる壺や、3号方形周溝墓出土の三日月形のヘラ記号が施された壺など、特徴的な資料が出土しています。口縁部が打ち欠かれた壺は、坪之内遺跡（平塚市）のSDH01方形周溝墓の南西隅部からも逆さまに押しつぶされた状態で出土しており、壺棺として用いられたものとみられています。



▲方形周溝墓出土の弥生土器〔若尾山遺跡〕（藤沢市郷土歴史課）

⑦ 時代の夜宵に

弥生時代後期になると、若尾山遺跡の居住域は中期後半代の墓域の東隣に造られ、以後古墳時代前期まで継続して営まれます。10号住居跡からは中期後半と同様に削器と石錘類が揃って出土しており、農耕と漁労からなる複合的な生業が引き続き営まれていたことがうかがえます。また当遺跡ではこの時期に位置づけられる希少な遺物として青銅器（銅鏃2点・銅環1点）が出土しており、周辺地域一帯のなかでも中核的な位置づけを持った集落であったことがわかります。



▲銅鏃・銅環〔若尾山遺跡〕（藤沢市郷土歴史課） 中央：長さ 3.8 cm

海の港・川の港

古墳—それは埋葬施設であると同時に、有力者の存在と地域の持つ強さを表示する装置でもあります。個々の古墳を構成する諸要素には政治的な背景が見え隠れし、それは造営する場所の選択にも見出せませぬ。律令国家の成立後も、地域が持つ土地の特性は政治機構の運営に大きな役割を果たすこととなります。本章では水上交通の観点からその様相を捉えてみます。

① 君臨する砂丘王

真土大塚山古墳（平塚市）から出土した三角縁神獸鏡は、この古墳の性格を特徴づける重要な遺物です。これまでに約 500 枚が発見されている三角縁神獸鏡の多くは、畿内の古墳時代前期の古墳から出土しています。そのため他の地方の古墳で出土すると、その被葬者は畿内との繋がりがあった人物として評価されます。真土大塚山古墳から出土した「陳是作四神二獸鏡」は、同じ鑄型によって製作された鏡が椿井大塚山古墳（京都府木津川市）のほか 2 基の古墳から計 4 枚が確認されています。なお真土大塚山古墳は早くに墳丘の削平を受けており墳形は不明ですが、ここでは南を前側とする前方後方墳とする説に従います。

真土大塚山古墳は平塚市域の砂丘地帯のなかでも最奥部に立地しています。右図は古墳を交差点として南北方向と東西方向の地形の起伏の変化を示したものです。両方向とも古墳が最も高い所に位置していることがわかります。古墳を首長が持つ権力と統べる地域の強さを表現した巨大土木構築物とする見方に基づけば、真土大塚山古墳はどこから見られることを意識しているのでしょうか。海から古墳までは当時でも 3.5 km ほど離れており、さらには手前にある砂丘が視界を遮っています。一方、より近くて視界を大きく遮るものがない相模川からは、側面がよく見渡せたことでしょう。両岸に丘陵が連なる中流域の風景から、広く開けた下流域の低地帯の景観へと切り替わるその境目に位置していることも、何らかの意図を感じさせます。

流域の遺跡の調査成果から、相模川は先史時代以来の交通の幹線路であることが指摘されています。真土大塚山古墳に葬られた人物は、その立地から相模川下流域の河川交通にも大きな影響力を持っていたことが推測されます。さらには河口部を管理下におきながら畿内の勢力とも通じることで、海上交通と河川交通とを結びつけていたものと考えられます。この地域にまさしく港のような機能が存在していたことが、古墳の副葬品と造られた場所から浮かびあがってきます。



▲三角縁神獸鏡〔真土大塚山古墳〕
(Image:TNMImageArchives) 径 22 cm



▲真土大塚山古墳を交差点とした周辺地形の起伏



柳葉式銅鏃 変形四獣鏡 管玉・ガラス小玉
▲真土大塚山古墳出土の副葬品（平塚市博物館：市指定文化財）

真土大塚山古墳が造営される直前の動きとして注目されるのが、近隣にある南原B遺跡（平塚市）です。弥生時代後期から古墳時代前期までの竪穴住居跡23軒と、古墳時代前期の方形周溝墓3基が確認されています。特に2号方形周溝墓は一辺約9.5mと他の2基より大型で、溝からは畿内系の壺が出土しています。当遺跡から真土大塚山古墳へと直接的に発展したか否かは明らかではありませんが、他地域との繋がりをもった有力者の存在がその基盤にあった可能性が指摘できます。



▲三角縁神獣鏡〔備前車塚古墳〕（複製）
（Image:TNMImageArchives） 径22cm



▲南原B遺跡2号方形周溝墓と出土した畿内系有段口縁土師器壺（平塚市博物館）高さ30cm



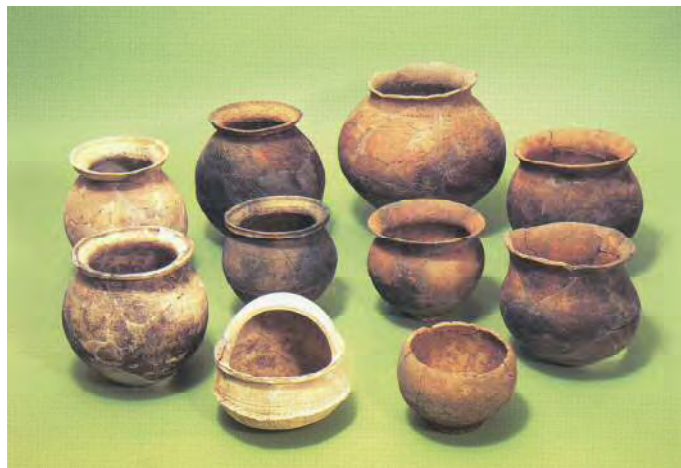
② まわる土器、めぐる人々

大源太遺跡では、近畿地方や東海地方から搬入された古墳時代前期の土器が、在地の土器に混ざって数多く出土しています。土器の移動は人の動きを示しますから、その背景に人々の活発な交流を透けて見ることができます。包含層中から出土した振紋鏡もこの時期のものとみられ、このような人の流れ、そして地の利を活かした海の流れに乗ってもたらされたのかもしれませんが。

大源太遺跡の北側にある若尾山遺跡でも、近江地方から持ち込まれた受口状の口縁を持つ甕4個体がまとまって出土しています。これらとともに、儀礼祭祀との関わりが指摘される手焙形土器も出土しています。手焙形土器はV章で触れる北仲通一丁目遺跡（横浜市）でも出土しており、沿岸部で執り行われた儀礼祭祀には何らかの共通する流儀があったのかもしれませんが。なおこの遺跡では、胴部が意図的に打ち欠かれたとみられる在地の壺などともに、火を受けたウマの頭蓋骨や凝灰岩片がひとつの土坑の中から出土しています。異なる様相を見せる祭祀遺構が、同一の遺跡内で存在するという特異な状況が認められます。



径6.7cm
▲振紋鏡・搬入土器〔大源太遺跡〕（青山学院大学考古学研究室）



▲手焙形土器・畿内系甕・近江系甕ほか〔若尾山遺跡〕
（藤沢市郷土歴史課）

③ 埋もれた湾を臨む古墳

神奈川県域では、古墳時代中期になると集落の数が急激に減少することが認められています。このような現象が生じた要因のひとつとして、地震などの自然災害の影響が考えられています。

発掘調査の際に確認された噴砂などの地震痕跡の分析から、南関東では古墳時代前期ごろに大規模な地震が発生していた可能性が指摘されています。砂丘などの海に近い低地の場合は、津波や液状化など甚大な被害を受けたことでしょう。また土地の隆起によって沿岸部の地形も変わり、これによって海の流れの方向も変化したものとみられます。その流れは河川が内陸から押し出した山崩れの土砂を運ぶことで砂の堆積を促進し、湘南砂丘地帯の東部では右図のように砂嘴で塞がれた湾が成立したとみられています。

中期後半になって再び人々の活動の痕跡が見出せるようになる大源太遺跡は、この湾の奥に位置します。集落の存在は明確ではありませんが、円墳の跡とこれに関係すると思われる埴輪片のほか、工場の整地工事によって壊されたスクモ塚も同時期の古墳とみられています。また若尾山でも市庁舎の建設に伴って同じころの古墳の副葬品と思われる遺物が出土しています。

大源太遺跡では後期にも古墳の造営が引き継がれるとともに、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など集落の存在を明確に示す遺構も確認されるようになります。特に掘立柱建物周辺では畿内系の土師器が出土しており、遠隔地とのつながりが示唆されます。また北側にある藤沢市 No.265 遺跡でも円墳が、背後の片瀬丘陵の崖面には新林横穴墓群も出現し、一帯を古墳時代中期から後期にかけての古墳群として認める意見もあります。

I 章でも触れたように、砂嘴で守られた湾や潟湖は港としての好条件を備えています。湾を間近に臨むこれらの古墳に葬られた人々もまた、港を管理・統率する役割を担った人物であったのかもしれませんが。



▲古墳時代中・後期ごろの藤沢市域沿岸部の地形想定復元図と古墳の分布 (上本・浅野 1998 をもとに作成)



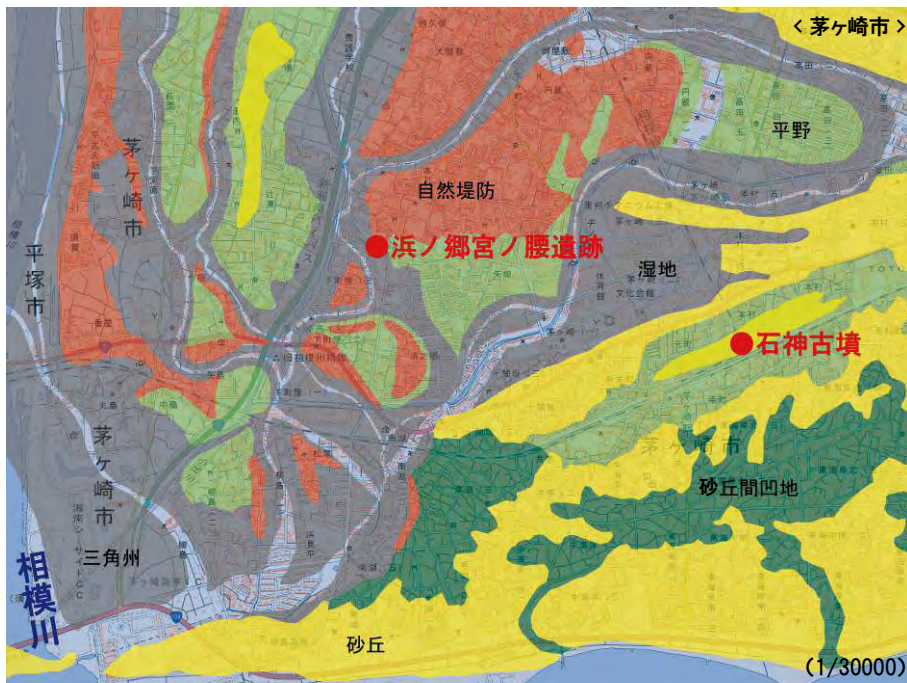
▲円筒埴輪片〔大源太遺跡〕 (藤沢市郷土歴史課)



▲円墳〔藤沢市 No.265 遺跡〕 (藤沢市郷土歴史課) 径 23～24m



▲円墳〔大源太遺跡〕 (青山学院大学考古学研究室) 径 8m



▲古墳時代中・後期ごろの相模川左岸流域の地形想定復元図と古墳の分布
(上本・浅野 1999 をもとに作成)

相模川の左岸側流域では、砂丘上にある石神古墳（茅ヶ崎市）のほか、自然堤防上にある濱之郷宮ノ腰遺跡からも古墳が確認されています。墳形はどちらも明らかではありませんが、石神古墳は前方後円墳である可能性も指摘されています。いずれも後期に位置づけられるものとみられます。

両古墳は上図のように相模川と河口部周辺で合流する支流沿いにあり、これは右岸側の平塚市域で後期の古墳が確認されている新町遺跡・高林寺遺跡も同様です。営力が大きく流域環境が不安定な本流を避けて、それに接続する小河川の流域に生産・経済活動の基盤が置かれていたことがうかがえます。一方、湘南砂丘地帯の西端部を流れる花水川下流域には後期に群集墳が形成されていたと考えられており、中里B遺跡（平塚市）で確認された八雲1号墳はそれを構成する1基とみられています。川を遡った先にある秦野盆地と相模湾とを接続する位置にあることから、交通の要衝としての河口域を抑える集団の存在が想定されています。



▲石神古墳の石室（茅ヶ崎市教育委員会）



▲円形周溝墳〔新町遺跡〕
(平塚市教育委員会) 径11m



▲八雲1号墳〔中里B遺跡〕
(平塚市教育委員会) 径11～13m



▲近世以前の平作川河口の地形想定復元図と古墳の分布
(澤・松島・澤 1994 をもとに作成)

④ 海を見つめる埴輪

東京湾・浦賀水道・相模湾と三方を海に囲まれた三浦半島は、そのものが巨大な港と捉えても過言ではないほど海との関わりが強い土地です。しかし、大きな河川が存在しないため海に流れ出る砂が少なく、砂丘や砂嘴はあまり発達していません。意外にも自然地形をそのまま港として活用できる土地は多くないのです。それだけに人々は、わずかに認められる砂の土地にも目をつけて活用していたようです。

左図は三浦半島で最も大きな川である平作川の河口部の地形想定復元図で、一帯が江戸時代に干拓される以前の状況を示しています。奥側の砂嘴は縄文時代中期の海退とともに形成が始まり、湾の入口を塞ぐように成長を続け、これに伴い背後の陸化が進んでいきます。これに当地域で確認されている古墳の位置を重ねると、後期の帆立貝形古墳である蓼原古墳（横須賀市）は砂嘴の上に、同じく後期の円墳・石棺墓が発見されている八幡神社前遺跡は陸化した平野の上に立地していることがわかります。



(1/300)

▲蓼原古墳 (『蓼原』)



▲琴弾埴輪〔蓼原古墳〕
(横須賀市自然・人文博物館：市指定文化財)



長さ 37 cm

▲石棺墓と礎石〔八幡神社前遺跡〕
(横須賀市教育委員会)

三浦半島の北半部を東西に貫く平作川の流域には、半島内で最も広い平野が形成されています。山がちな三浦半島においては、浦賀水道へと接続する陸路・水路として重要な地域であったことが想定されます。蓼原古墳と八幡神社前遺跡内の古墳には、その海側の入口に大きな影響力を有していた人物が眠っているものとみられます。これらの古墳には埴輪が伴っており、墳丘の上に立ち並ぶその姿は川を上下する船や河口に近づく船に、この地域を統べる有力者の存在を強く示していたことでしょう。



(1/2000)

▲勝谷遺跡周辺の地形分類 (現在) と古墳時代遺跡

八幡神社前遺跡では、墳丘を持たない石棺墓の存在も注目されます。足元からは礎石とみられる石製品が出土しているとともに、石組も舟の舳先を思わせる積方がなされており、被葬者と海との強いかわりがうかがえます。勝谷遺跡 (三浦市) でも砂丘の裾に数基の石組が認められ、これらも同様の石棺墓とみられています。近くでは東側の丘陵崖面に開く雨崎洞穴でも石棺墓と木棺墓が発見されているほか、稜線上には前方後円墳と円墳、横穴墓群からなる雨崎古墳群が形成されています。半径 50m ほどの範囲に多様な形態の墓が認められるという状況は、海という広く開かれた世界を通して、多様な社会や文化とのつながりを持っていた人々の姿を浮かび上がらせます。



▲石棺墓〔雨崎洞穴〕 (『雨崎洞穴』)



▲石組遺構〔勝谷遺跡〕



▲鴨居港周辺の地形分類（現在）と遺跡分布

小荷谷遺跡（横須賀市）はこの砂丘の平野側一帯に広がる遺跡です。発掘調査により発見された古墳時代末から奈良時代ごろにかけての建物群は、倉庫とみられる小規模な掘立柱建物群と、比較的規模の大きい側柱式建物跡や布掘建物跡が一定の空間を隔てて並べられていました。官衙のような公的な施設に特徴的な建物の配置です。また、平安時代の井戸の板枠材には、その用途には意味をなさない箇所にも方形の穴や貫通しない掘り込みが施されたものが含まれていました。これらは船の板材を転用したものと推測され、穴や掘り込みは板を組む際のホゾ穴とみられています。

当遺跡のある三浦半島の東部一帯は、浦賀水道を横断する際の三浦半島側の発着地とされる、走水郷に比定されている地域です。史料上の「走水」と小荷谷遺跡との関係性は明らかではありませんが、少なくとも潟湖の地形環境を利用した公共性の高い港湾施設があったとみて差し支えないでしょう。房総半島までは目と鼻の先であり、海を渡る前の補給や風待ちなどのためにこの場所が利用されたことが想定されます。

小荷谷遺跡では古墳時代の遺物も数多く出土しており、管状土錘や有頭石錘の存在から漁労活動が行われていたことがわかりますが、同時期の住居跡は確認されていません。ただし西側の台地上にある上の台遺跡では同じころの集落が営まれており、釣針あるいはアワビ鉤を思わせる鉄製品や管状土錘などの漁労具も伴っています。この土地の港としての利用のはじまりは、このころにまで遡るのかもしれませんが。

⑤ 消えた潟湖に埋もれた港

横須賀市にある鴨居港は三浦半島の東端・観音崎にほど近い小さな漁港です。今もなお砂浜に船の揚がるその風景のうしろには、埋もれた港がひっそりと眠っています。

左図は鴨居港周辺の現在の地形分類図で、海岸線を縁取る砂丘の背後には平野が広がります。この平野は戦後まで水田として使われており、本来は湿潤な土地であることを教えてください。

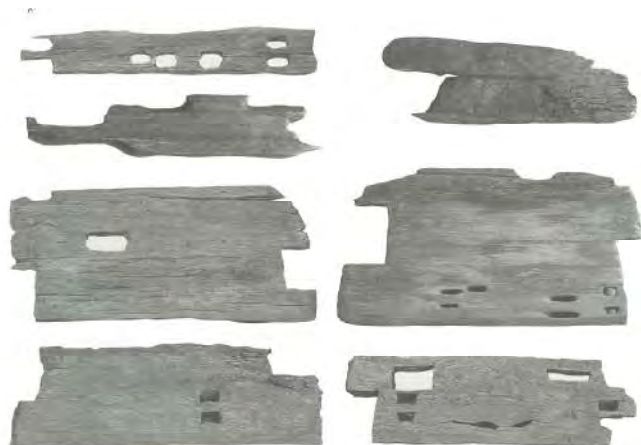
海と陸とを遮る砂丘とそれに護られた湿地という組み合わせは、かつてここに潟湖が存在していたことを物語っています。



▲掘立柱建物跡〔小荷谷遺跡〕（横須賀市教育委員会）



▲井戸跡〔小荷谷遺跡〕（横須賀市教育委員会）



▲井戸枠材〔小荷谷遺跡〕（横須賀市教育委員会） 右下：長さ 108 cm



▲竹の花遺跡周辺の地形分類図（現在）

▲子持勾玉
（神奈川県立歴史博物館）

小荷谷遺跡と上の台遺跡で共通して出土する古墳時代の遺物には、祭祀遺物である滑石製模造品もあげられます。集落内と海際の両方で何らかの儀礼祭祀が執り行われていたことがわかります。

多数の土師器とともに子持勾玉などの滑石製模造品が採集されている竹ノ花遺跡（湯河原町）も、砂嘴の内側で祭祀が行われていた事例のひとつと考えられます。左図に示した現在の地形分類図から推測すると、遺跡は扇状地と砂嘴を背後に控えた湾内の海際付近に位置していた可能性があります。航海や豊漁への願い、あるいは箱根山をはじめとする火山への恐れなどが人々の心にあったのかもしれませんが。

⑥ 川の港

走水郷は古代の御浦郡を構成する郷のひとつで、平作川沿いの横須賀市公郷町周辺が郡衙の比定地として重要視されています。ただし平作川河口部は古代の遺跡に乏しく、船はそのまま川を遡り郡衙周辺まで至った可能性もあります。そのため平作川流域のどこかに川の港である「川津」の存在があったとみられますが、明らかではありません。

神奈川県域の遺跡で発見された川津としては、高座郡衙跡の比定地である下寺尾官衙遺跡群（七堂伽藍跡）の河道跡があります。遺跡群を西から南へと回り込むように流れる小出川の屈曲部左岸側を造成し、自然礫で護岸を整備した船着き場が発見されています。背後に建つ4棟の掘立柱建物跡は、これに伴う倉庫か管理施設とみられています。河道跡の覆土からは人面墨書土器をはじめとする多くの祭祀遺物が出土しており、郡家を主体とした公的な祭祀の場としても利用されていた可能性があります。下流にある下大曲一丁畑遺跡（寒川町）でも、現河道に接する位置で確認された土坑内から墨書土器が発見されており、ここにも郡家と河川交通に関係する何らかの施設が置かれていた可能性があります。

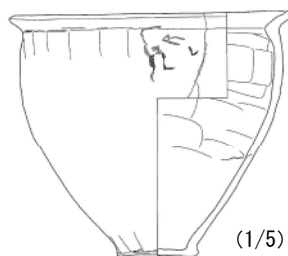


▲下寺尾官衙遺跡群周辺の古代の地形想定復元図と主な遺構の分布
（上本・浅野 1999 をもとに作成）



▲墨書土器出土土坑
〔下大曲一丁畑遺跡〕

土坑から出土した墨書土器▶



▶川津遺構（河道跡）
〔七堂伽藍跡〕

▼川津遺構から出土した人面墨書土器
高さ 13 cm



高座郡衙を目指して海の港を発った船は、相模川河口に入ってすぐに右手へ分流する小出川へと向きを変え、遡っていきました。一方で相模国府へと向かう船はそのまま相模川を進んでいき、国府域の近くで相模川に流れ込む細い流路に入ります。この流路沿いに立地する林B遺跡（平塚市）では、竪穴住居跡から火を受けた多量の緑釉陶器が出土しました。これらは製品を保管していた倉庫で火災が起き、そのまま放棄されたものようです。倉庫の存在と遺跡の立地を考えあわせると周辺に川津があった可能性がありますが、残念ながら遺構そのものは確認されていません。



▲竪穴住居跡内緑釉陶器出土状況〔林B遺跡〕（平塚市教育委員会）

⑦ 川と川とをつなぐ川

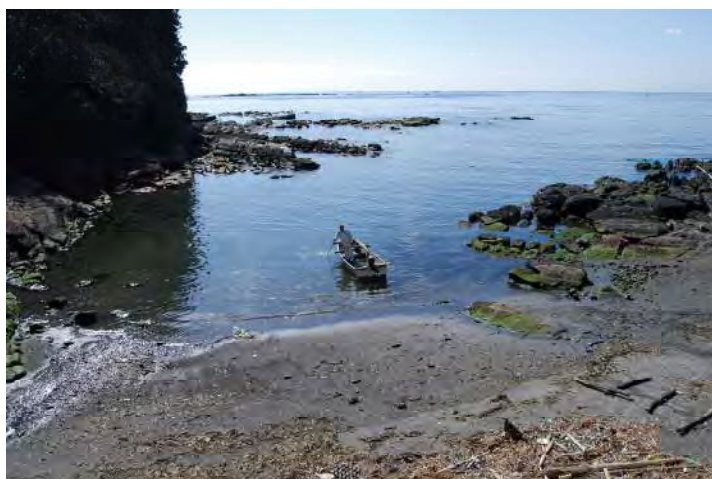
相模国府に向けて送られた物資は、川津からさらに荷を載せ替えて他の場所へと船で運ばれたことを思わせる痕跡が発見されています。新町遺跡・東中原G遺跡・本宿B遺跡（いずれも平塚市）で確認

されている巨大な溝状遺構です。これらは人工的に開削または自然流路に手を加えて整備した運河である可能性が指摘されています。運河は国府域の西側を流れる花水川水系の河川とも接続することで、水系の異なる流域間の水上交通を可能にしていたとも考えられています。



▲運河とみられる溝状遺構〔上：新町遺跡・下：東中原G遺跡・右：本宿B遺跡〕（平塚市教育委員会）

相模川の支流である目久尻川流域でも、逆川とよばれる運河が相模国分寺と国分尼寺（海老名市）の間を流れていました。この運河を利用して運ばれたもののひとつが瓦です。国分寺創建期の瓦は乗越遺跡（横須賀市）の窯跡群で生産されており、軒丸瓦の文様が一致することが確かめられています。乗越遺跡の窯跡群は目前に小さな入江を抱えた谷の斜面に構築されています。焼きあがった瓦はこの入江から積み出されて海を渡り、相模川から目久尻川へと遡り、さらに逆川へと分かれ、国分寺の建設現場へと引き渡されたものとみられます。



▲乗越遺跡から瓦を運び出したとみられる入江（『乗越遺跡』）

⑧ うねる砂間にうえるイネ

国府域周辺を走る巨大な溝には、農業用の用水路とみる意見もあります。II章でも触れたように、砂丘間凹地は湿地化し易く、湘南砂丘地帯では少なくとも平安時代には水田に利用されていたことが発掘調査から明らかとなっています。

構之内遺跡では、水田跡とこれを耕作した人々が生活したとみられる砂丘列上の集落が隣り合って確認されています。水田跡は溝状遺構によって長方形に区画され、それを縁取るように畦畔と考えられる土の高まりも認められています。集落内からは鉄製の鍬先や鎌といった耕作との関連を思わせる遺物も出土しています。なお溝状遺構は砂丘列の斜面上にも多数認められていますが、これらは畑作に係る遺構と考えられており、土地の性質に応じた空間利用のありかたがうかがえます。



▲水田遺構〔構之内遺跡〕(平塚市教育委員会)



▲本村居村B遺跡周辺の地形と水田遺構の検出地点



▲構之内遺跡周辺の地形と水田遺構の検出地点



▲(上) 6号木筒の出土状況
(下) 田下駄
(〔本村居村A遺跡・本村居村B遺跡〕)

▲2号木筒(『木筒、語る』)
(〔本村居村B遺跡〕(茅ヶ崎市教育委員会))

本村居村B遺跡では平安時代から昭和に至るまで、連綿と水稲耕作が行われていたことが発掘調査によって確認されています。そのため土壌は常に湿潤な状態に保たれた結果、曲物をはじめとする数多くの木製品が分解されることなく残存していました。なかでもこれまでの発掘調査で計6点が出土している木筒の存在は重要で、砂丘間凹地が持つ性質が古代の文字資料を現在に伝えるのに重要な役割を果たしたことがわかります。

6点の木筒のうち2号木筒は、放生会の実施に関する国家からの指示文書と考えられています。仏教の不殺生戒の思想に基づく行事である放生会では、捕獲した鳥や魚などを自然に解き放つ儀式が行われますが、その場所としてこの地が選ばれていた可能性が示唆されます。砂丘間凹地は人工的な地形改変によって水田に作り変えられてはいても、用水路から出入りする魚や虫を啄みに訪れる鳥などの姿から、自然と人間とを繋ぐ場所として人々に認識されていたのかもしれませんが。

⑨ 海のなりわい

三浦半島では、丸みのある胴部と短く直立する口縁部を特徴とする「三浦型甕」が多くの遺跡で出土しており、湘南砂丘地帯でもわずかながら確認されています。この土器については以前より海水を煮詰めて塩をつくる製塩土器とする見方がありましたが、三ヶ岡遺跡（葉山町）での発掘調査によって砂丘上に構築された炉址跡遺構などとともに多量に出土したことでその可能性が一層強くなりました。

一方、形態的特徴や使用痕跡の観察などを踏まえると、積極的には製塩のみに用いたとは言い難いとする指摘もあります。ただし三浦型甕が沿岸部の遺跡に特に多く認められることを踏まえれば、何らかの海産物を熱加工によって製品化するような生業が三ヶ岡遺跡などで取り組まれ、それが一帯に流通していたことは確かです。塩はそのような製品のひとつに数えられるのかもしれませんが。



高さ（残存）9.4 cm

▲三浦型甕〔三ヶ岡遺跡〕



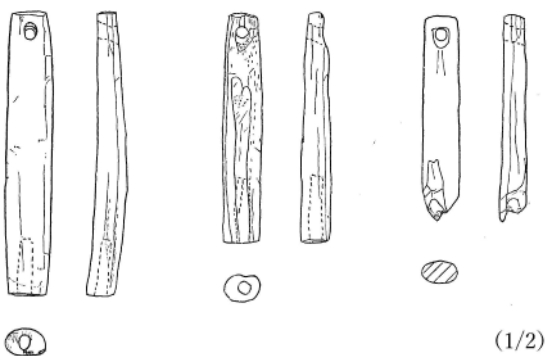
▲炉址跡遺構〔三ヶ岡遺跡〕



▲土器集積遺構〔三ヶ岡遺跡〕



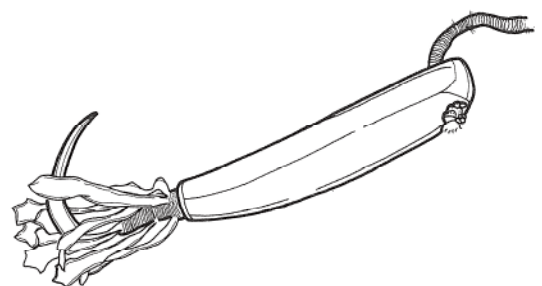
▲土坑検出状況〔浜諸磯遺跡〕（個人）



▲組合式釣針〔浜諸磯遺跡〕（『浜諸磯遺跡』）

三浦半島南西部の諸磯湾に面した砂丘上に展開する浜諸磯遺跡（三浦市）では、骨角製の組合式釣針の軸部が多数出土しています。民俗資料などとの比較から、これらはカツオ漁に用いられた疑似餌釣針とみられています。実際に当遺跡では土坑内から刃物で切断した痕跡が認められるカツオの骨が多量に出土しています。また同じ土坑内からは、岩礁に生息するサザエやアワビなどの貝殻も多数確認されました。これらのことから当遺跡は、カツオ漁と潜水漁に特化した専門的な漁労集落として評価されています。

『延喜式』には相模国が中央政府へ収める品々として海産物もそのひとつに数えられており、そのための物資を確保することを目的とした、選択的な漁労活動の痕跡として捉える意見もあります。



▲疑似餌釣針（民俗資料）（中村1994）

港都・鎌倉

今もなお多くの寺社仏閣が立ち並び、落ち着いた佇まいをみせる、古都・鎌倉。山に閉じられた東・北・西側には幕府の中枢部が置かれたのに対して、海に開かれた南側の砂丘地帯には、中世都市鎌倉の産業や物流を支える街並みが広がっていました。その様子を探ることで見えてきたのは、現在にも通じる都市と環境の問題でした。

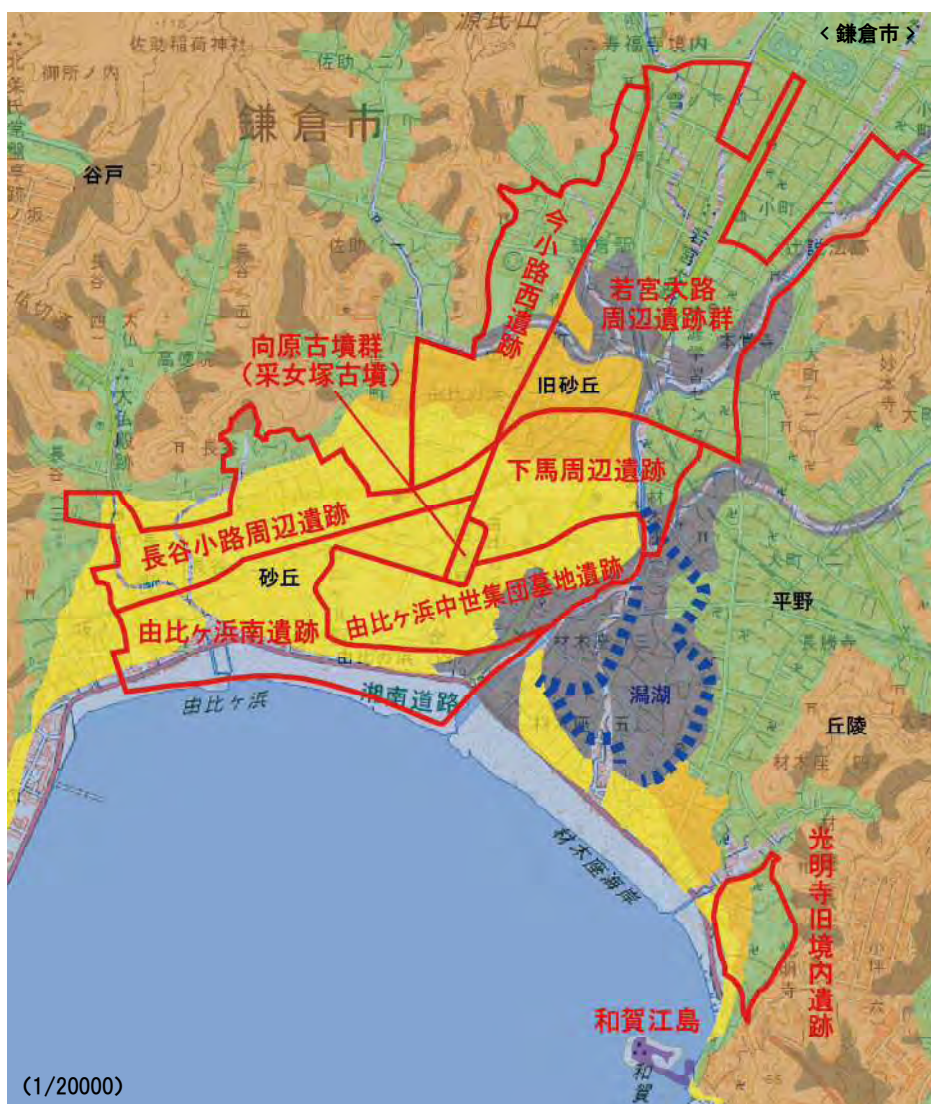
① 浜辺の死の世界・祀の空間

鎌倉の砂丘地帯における土地利用のあり方は、古墳時代になって墓域として用いられることで明瞭となります。長谷小路周辺遺跡などで確認されている土坑墓のほか、人物埴輪・馬形埴輪の出土が伝えられている采女塚古墳（煙滅か）の存在から、墳丘を持つ古墳が存在した可能性もあります。また近年発見された長谷小路周辺遺跡の墳丘を持たない石棺墓からは、八幡神社前遺跡や勝谷遺跡などの事例との関係性が示唆されます。

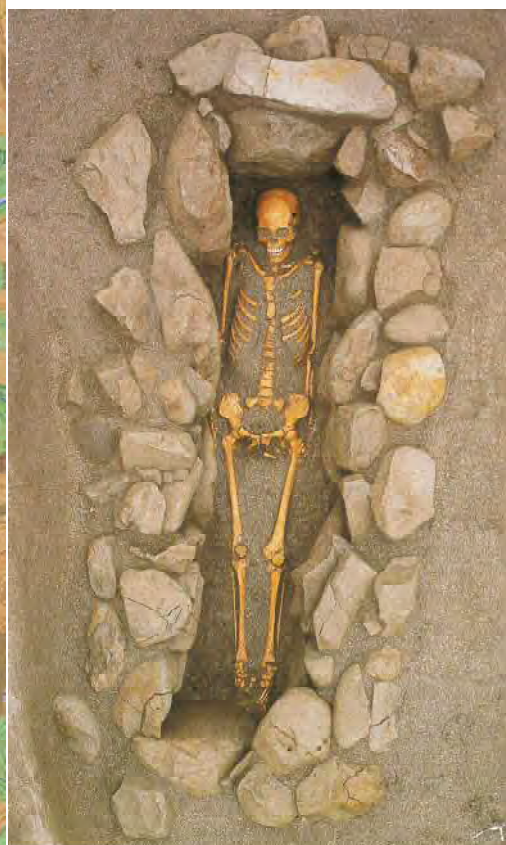
古墳時代から中世にかけての鎌倉の沿岸部は、滑川の右岸側に砂丘地帯が広がっていき一方、左岸側には砂丘と砂嘴に阻まれて河口に滞った川の水が潟湖を形成し、次第に湿地化していったと想定されています。奈良時代になると今小路西遺跡内に鎌倉郡衙が設置されますが、その選地の背景にはこの潟湖を港として利用する目的もあったとみられます。これらの古墳に葬られた人々もまた、港の支配や管理に差配を振った人物であろうことは想像に難くありません。



▲人物埴輪〔采女塚古墳〕
（横浜国立大学教育学部）
高さ（残存）33 cm



▲中世鎌倉の地形想定復元図と遺跡の分布（上本 2000・齋木 2009 をもとに作成）



▲石棺墓〔長谷小路周辺遺跡〕（鎌倉市教育委員会）

中世になると墓域としての砂丘地帯の利用はより活発となり、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡をはじめとしてこれまでに700基前後もの埋葬遺構が発見されています。なかには右写真のように、数百体にも及ぶ遺体がまとめて埋葬されていた例もあります。

砂丘地帯に葬られた人々が一般の都市民だとみられるのに対し、中世鎌倉でさかんにつくられた岩盤を掘り込んで構築した「やぐら」には、特定の限られた人々が骨を納めました。鎌倉という狭く限られた都市空間のなかで遺骨の置き場所をどこに求めるのかは身分に関わらず切実な問題であり、結果として一方は岩盤の露頭に、他方は砂丘地帯に墓を設けたものと考えられます。



▲祭祀遺構〔由比ヶ浜中世集団墓地遺跡〕(鎌倉市教育委員会)

儀礼祭祀にかかわるとみられる遺構や遺物は、中世にも引き続いて認められます。

由比ヶ浜南遺跡では、ウマ・ウシ・イルカの頭蓋骨などを東西約7m・南北約2mのコの字形に並べた壇状の遺構が発見されました。頭蓋骨はすべて正面を海側に向けて置かれていました。他に類例のない遺構であるため構築された意図や背景には不明な点が多いですが、海に対する何らかの意識が反映された構築物とみることができるとも考えられます。

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡からは、それぞれに「天盤」・「地盤」と墨書された2枚のかわらけが出土しました。陰陽師が執り行った六壬神課という占いに用いられた道具である「式盤」とみられます。『吾妻鏡』には北条執権期の鎌倉には多くの陰陽師がいたとの記述があり、そのことが考古資料からもうかがえる貴重な事例です。

このほかにも、由比ヶ浜南遺跡で確認された流鏑馬などの行事に関係するとみられる柵列など、武家儀礼の場としても砂丘地帯は利用されていたようです。都市の周縁にあるという立地や、外部に開かれた場所であるという境界性、それゆえに様々な身分や職業の人々が行き交い混り合う多層性が、砂丘地帯に多様なあり方の儀礼祭祀の痕跡が残されることとなったのではないかと考えられます。



▲集積埋葬遺構〔由比ヶ浜中世集団墓地遺跡〕(鎌倉市教育委員会)

奈良・平安時代になると砂丘地帯も生活の場としての利用が始まりますが、それに合わせて儀礼祭祀に関係する遺構や遺物も散見されるようになります。

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡では、アワビの貝殻と土師器の坏が重なり合うように検出され、鉄鏃や刀子も地面に突き刺さったような状態で出土したと報告されています。儀礼祭祀の所作や光景を思い浮かばせる事例です。また獣骨などを焼いてその割れ目の形で吉凶を占う呪術に使われた卜骨も出土しています。県内では浜諸磯遺跡をはじめとする三浦半島の沿岸部の遺跡で多く認められる遺物であり、海を背景とした何らかの共通する儀礼祭祀の存在が示唆されます。



▲動物骨を用いた壇状遺構〔由比ヶ浜南遺跡〕(鎌倉市教育委員会)



▲墨書かわらけ〔由比ヶ浜中世集団墓地遺跡〕(鎌倉市教育委員会)



▲ 竪穴建物跡〔下馬周辺遺跡〕 6.4×6.9m

② 建ち並ぶ倉庫・職人

中世鎌倉の砂丘地帯では、竪穴建物と呼ばれる半地下式の建物の跡が密集するように検出されています。これらは主に倉庫として使用されていたとみられています。

例えば下馬周辺遺跡では、竪穴建物の床面を掘り込んで常滑焼の大甕を設置し、内部に何らかの液体を貯蔵していたことが判明しています。同様に埋設した甕の中から銭貨が出土した事例や、床面を掘り込んだ穴に緡（銭貨の穴に紐を通して束ねたもの）の状態で見つめられていた例もあります。



▲ 竪穴建物床面への埋設事例（左：常滑焼大甕（貯蔵容器）・中：緡銭・右：鐘）〔下馬周辺遺跡〕

多数の倉庫が群をなして広がる様子は、この地が物流の拠点であったことを示します。海や陸からここへと集められた物資は、鎌倉の都市圏のみならず、周辺地域や東日本一帯にも供給されたとみられています。

一方で竪穴建物を工房とする見方もあります。

鎌倉の砂丘地帯では、製作途中で破損等が生じたために廃棄されたとされる工業製品、あるいはその原材料、製造過程で生じた残滓等が頻繁に出土します。例えば部材を切り取った痕跡のある動物骨は、栗形（刀の下げ緒を通す部品）などの骨製品を製造した際の原材料であると推測されます。また、浅い掘り込みが部分的に施された板状の石材は、加工する過程で割れるなどしてしまい製品化できなかった硯とみられます。鑄型や坩堝、鉄滓の存在からは金属製品の鑄造が行われていたことがわかります。

原材料や未製品、副産物等は確かに竪穴建物を覆う土の中からも発見されます。しかしながら、金属製品の製造に必要な鍛冶炉などは明確には確認されておらず、工房と断定できる事例は残念ながらありません。ただし、これらの製品の製造を担っていた職人が砂丘地帯で活動していたことは確かなようです。彼らがそこに営みの場所を選んだ理由には、政治的な背景や身分秩序はもちろん、物流の拠点地にいることで材料や道具、あるいは人員を確保しやすいなどの理由もあったと思われます。また動物の解体に伴う衛生上の問題や、作業に伴う騒音などの環境問題も絡んでいるものと考えられます。



こうがい
分
（骨角製）



辻具（骨角製）



耳かき
（骨角製）



硯



鉄滓が付着したかわらけ

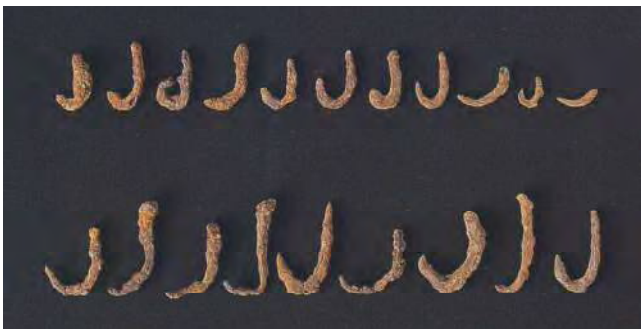
▲ 中世鎌倉の工業製品〔下馬周辺遺跡〕

③ 中世鎌倉水族館

鎌倉の砂丘地帯の遺跡からは、多量の貝殻が竪穴建物の床面や土坑の中に廃棄された状態でしばしば発見されます。長谷小路周辺遺跡の事例では計8086個の貝殻がひとつの土坑のなかから出土し、そのうちの約9割がイボキサゴをはじめとする小型巻貝でした。これらは湾の内側にある浜や干潟を好む種であり、目の前の浜や潟湖の周辺で日常的に採集されていたものと推測されます。塩茹でや汁物などに調理されたものでしょう。これらに対し、わずかながら発見されているアワビやサザエなどは岩礁に住む種であり、岩場のある稲村ヶ崎などで採集されたものかも



▲土坑内に廃棄された貝殻〔長谷小路周辺遺跡〕(鎌倉市教育委員会)



▲中世鎌倉の漁労具 (上：釣針軸部・中：鉄製釣針・下：管状土錘)
〔由比ヶ浜南遺跡〕

しれません。街中の遺跡から出土したものは、武家の宴席などで振る舞われたものでしょうか。

街中の遺跡では貝殻とともに魚骨の出土も認められます。由比ヶ浜南遺跡では、鉄製の釣針と骨角製の釣針軸、管状土錘などの漁労具が多数出土しており、専門的な漁師たちの活躍が鎌倉の海の食を支えていたことがうかがえます。

また鎌倉の遺跡からは街中でもクジラ・イルカ類の骨が発見されます。その多くは解体の際に付いた刃物の痕跡が残されており、また一部の部位の骨格のみが出土する例がほとんどです。『吾妻鏡』には、死んだ「大魚」が鎌倉の浜などに多数流れついたとする記事が認められますが、この大魚とはクジラやイルカのことと考えられています。何らかの理由でクジラやイルカが海辺に乗り上げる、いわゆる寄り鯨・流れ鯨の様子を記録したものです。同記事には打ち上げられた大魚の肉が売りさばかれ、家々では燃料用の油を採ったとする記述もみられます。街中でみられる骨は、そのときに残されたものなのかもしれません。

クジラ類の骨は、前項でも触れた骨角製品の材料にもなっており、砂丘地帯でも多数出土しています。ただし頭部などの一部の部位は、その用途には向かないために廃棄されたようで、本来の形を保ったまま出土する例も少なくありません。

④ 海の彼方から浜の此方へ

鎌倉の浜辺に荷揚げされた品々のなかには、海の遙か彼方からもたらされたものも数多く含まれています。

その代表的な存在が中国産の陶磁器です。龍泉窯（浙江省）で生産された青磁は特に人気が高かったようで、浜辺に打ち上げられた「海揚り」の破片の多さからもそのことがうかがえます。これらの多くは市街地の廃棄物が何らかの理由で海へと流出したものとみられており、現代の都市が抱える大量消費とその処理の問題とも重なります。

長崎県の西彼杵半島に一大生産拠点があつた滑石製石鍋は、東日本では鎌倉で最も多く出土しています。重量物であるため陸上輸送には向かない製品である一方、運ぶ船にとっては商品とバラスト（船底に積んで、船を安定させるための重量物）とを兼ねることができます。港から港へと渡る交易船の姿が浮かび上がってきます。

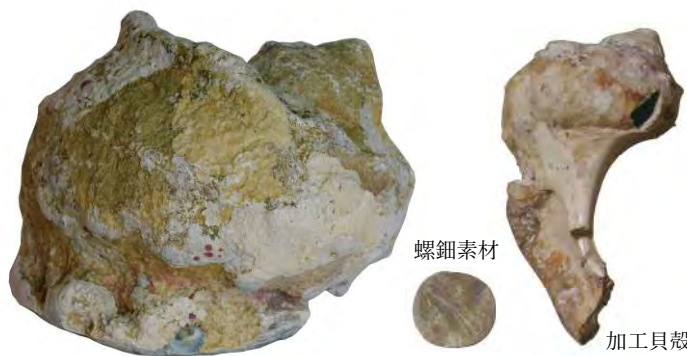
若宮大路周辺遺跡群で発見された、真珠光沢をもつ板状の加工品は、国内では奄美群島から先島諸島にかけての地域を主な生息地とするヤコウガイの貝殻を素材とした、螺鈿の材料と推測されています。西から南から押し寄せる波は、様々な色のきらめきとともに鎌倉の浜辺を洗っていったのです。



青磁鎗蓮弁紋碗〔下馬周辺遺跡〕
径 15 cm



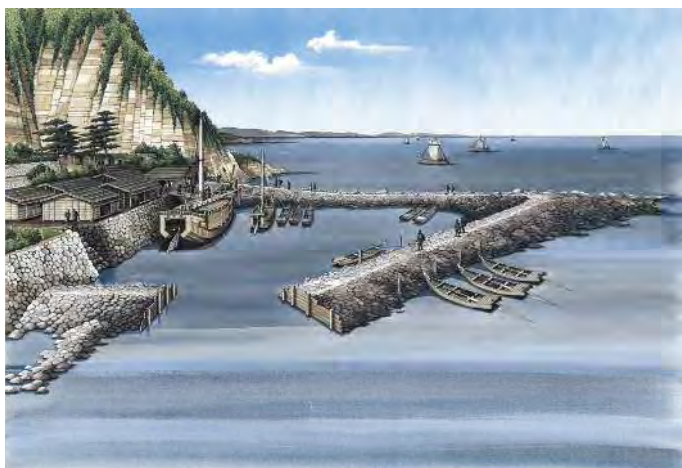
滑石製石鍋▶
〔若宮大路周辺遺跡群〕
径 18 cm



▲ヤコウガイ（原生）と鎌倉出土の関連遺物
左：宮古島（沖縄県）採集・中〔若宮大路周辺遺跡群〕
右〔由比ヶ浜中世集団墓地遺跡〕（鎌倉市教育委員会）



▲和賀江嶋 現況



▲和賀江嶋復元図（江戸時代）
（国土交通省東京湾口航路事務所）

⑤ 和賀江嶋一港を埋めた港一

遠浅である鎌倉の海は、滑川河口の潟湖や浜に着くことのできる船の大きさを制限させてしまい、大型船は沖に停泊して舳によって荷の積み下ろしをせざるを得ませんでした。不便かつ危険が伴うこの状況をみた勧進聖の往阿弥陀仏は、湾の東端にある飯島岬に港湾施設を整備する許可を幕府に求め、貞永元年（1232年）には船着き場と防波堤の機能を併せ持つ「和賀江嶋」が竣工します。

和賀江嶋の構築により、鎌倉の港湾機能はより強化したに違いありません。ところが旧くからの港である滑川河口の潟湖は徐々に機能不全に陥っていったようです。和賀江嶋が西からの流れをせき止めることによって漂砂が一带に滞留してしまい、これに伴って潟湖内の離水・湿地化が進行してしまったのです。

利便性の追求は都市の発展には必要不可欠な要素です。近代的な土木工学が日本にもたらされる以前の出来事ではありますが、開発する土地が本来持っている自然の営力に対する視点と十分な配慮がなければ、このような思わぬ事態を招いてしまうということを、鎌倉の海の歴史は教えてくれています。

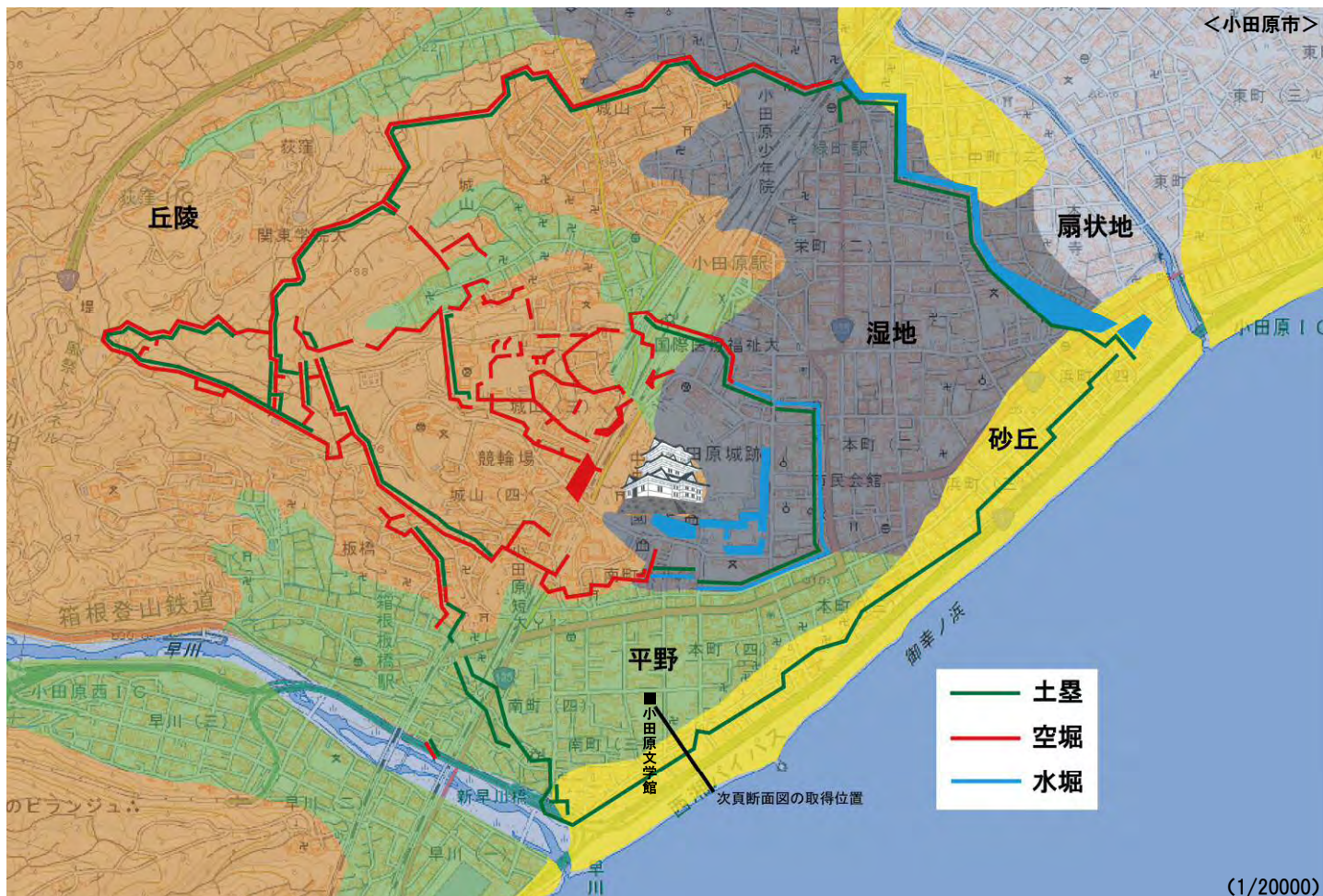


▲碇石〔光明寺裏遺跡〕（鎌倉市教育委員会） 長さ 132 cm

V

むすんで ひらいて

戦国乱世から泰平の世へ。そしてやがて訪れる近代化の波。その狭間には、砂丘・砂嘴のうえにむすび、ひらかれたものがありました。残念ながらそのほとんどは遺跡としては残されてはいませんが、地形の観察とわずかながらに行われている発掘調査の成果は、その面影をおぼろ気ながらも私達に伝えてくれます。



▲小田原城周辺の地形分類図（現在）と土塁・空堀・水堀の配置

① 砂の護り

天正16年(1588年)、豊臣秀吉との決戦が刻一刻と迫る小田原城では、巨大な防御施設の建設が進められていました。周囲約9kmにわたって城下町全体を土塁や空堀で取り結ぶ、総構の造営です。

京都を発った豊臣秀吉は、約15万人の軍勢を率いてついに小田原城に攻め込みます。天下統一の総仕上げとなった、天正18年(1590年)の小田原征伐です。迎え撃つ小田原北条氏は持久戦を選びますが、3ヵ月にもおよぶ籠城を続けることができた背景には、この総構の強固な防御性があったといわれています。

防衛能力追究の結晶たる城は、膨大な量の技術と知識が融合した巨大土木建築物です。なかでも

どこにどのような施設を配置するのかという問題には地理学的・地形学的な知識が必要不可欠でした。

上図は小田原城周辺の現在の地形分類図上に、土塁と水堀・空堀の位置を記したものです。天守閣が建つ場所は、半島状に飛び出た丘陵の先端に位置しており、城下の全体と相模湾一帯を見渡すことができます。背後の丘陵部には尾根筋などの地形を利用した土塁が巡り、総構にはこれに空堀が組み合うことで防御性の強化が試みられています。

他方、天守直下と酒匂川に並行して走る水堀は、海岸沿いに伸びる砂丘と丘陵に阻まれた、酒匂川の氾濫平野上に設けられています。水との相性のよい土地に合わせた配置ということができるでしょう。

砂丘上には酒匂川の右岸から早川の左岸までを結ぶ土塁が設けられていました。小田原征伐の際は、海からも約1万4千人に及ぶ水軍が取り囲んでいましたが、固い砂の護りと脇に控える2本の天然の水堀が、その侵入を阻んでいたのです。

右図は海岸線から土塁が残存している地点を經由し、小田原文学館に至るまでの地形の起伏を表したものです。浜から急速に立ち上がった砂丘の斜面は、150mほどで標高約9mに達するとなだらかに下りはじめ、海岸線から200mほどで平野との境目に至ります。土塁はこの砂丘の稜線をたどるようにめぐらされており、海面からの高低差を効果的に利用した「砂塁」とでもいうような機能を砂丘が担っていたことがわかります。

小田原北条氏の敗戦によって城は開かれ、次第に総構の撤去も進んでいき、小田原の砂丘にも平和な時間が訪れます。しかし江戸時代の終わりごろ、日本近海に頻繁に訪れる外国船への警戒が強まるようになると、砂丘は再び護りの場としての役割を与えられることとなります。嘉永5年(1852年)に完成した「御台場」3カ所の設置です。現在ではその痕跡はほとんど残されていませんが、跡地には砂丘の頂部から浜の方へとせり上がっていくわずかな傾斜を認めることができます。地盤の弱い砂丘の上で強固な建造物を築くには相当な技術力が必要だったことでしょう。工事の指揮をとった江川英龍えがわひでたつは竣工の翌年には品川台場の建設に着手していますが、小田原の砂丘で得た経験がそのどこかに活かされているかもしれません。



▲砂丘上の土塁残存地点周辺の地形断面図



▲砂丘上の土塁が残存する地点の現況 (大蓮寺付近)



◀「文久図」に描かれた台場
▼荒久台場部分(左下)の拡大
(小田原城総合管理事務所)



② 閉じる砂嘴、開くYOKOHAMA

神奈川県いなりやまの県庁所在地にして、日本有数の大都市「横浜」。その地名の由来をご存知でしょうか。一説には、現在は神奈川県いなりやまの庁舎などが建つその下に埋もれている砂嘴が、横に長く伸びている様子から名づけられたとされています。江戸時代になってこの砂嘴で塞がれた湾内が埋立てられることで、現在の横浜の地盤ができあがります。

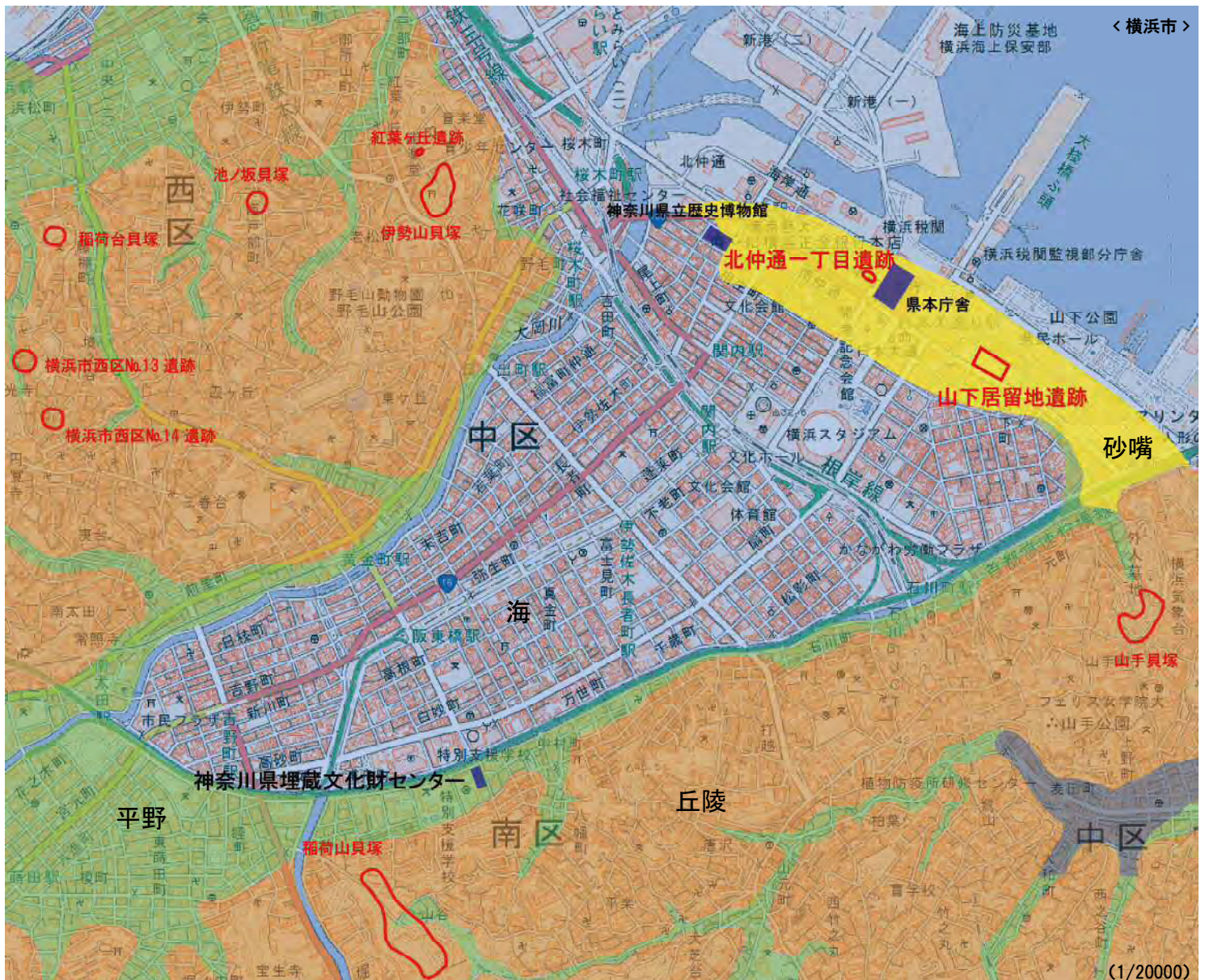
ではこの砂嘴〈ヨコハマ〉の考古学的な歴史はどこまで遡れるのでしょうか。山下居留地遺跡からは、幕末から近世の遺物に混ざって、縄文時代中期・後期の土器が発見されています。湾の周囲には同時代の遺跡が数カ所で確認されており、貝塚も丘陵上に点々と分布しています。特に稲荷山貝塚では湾の内側での漁労だけではなく、外洋にも漕ぎ出して漁を行っていたことが骨角製の銚もりなどの出土から推測されています。砂嘴上で出土した縄文土器は、この場所がこれらの貝塚を残した人々が漁に出向いた際に一時的に留まった場所であることを示しているのかもしれない。



▲現在の〈ヨコハマ〉の風景



▲縄文土器・土器片銚〔山下居留地遺跡〕



▲〈ヨコハマ〉周辺の地形分類図（現在）と関連遺跡の分布



▲手焙形土器〔北仲通一丁目遺跡〕



◀居留地で使われた外国製のビン・食器類〔山下居留地遺跡〕



▲居留地の建物跡〔山下居留地遺跡〕

弥生時代末から古墳時代前期ごろになると、〈ヨコハマ〉の上にも竪穴住居が出現します。同じ時期の土坑からは手焙形土器が出土しており、Ⅲ章で触れた若尾山遺跡の事例も含めて、沿岸部に共通する儀礼祭祀の存在が疑われます。

中期になると遺構・遺物ともに認められなくなりますが、後期には再び竪穴住居が建てられるようになります。この時期の遺物としては環状土錘が目立って出土しており、湾の内外で網漁を中心とした漁労活動が行われていたことがうかがわれます。

ここから〈ヨコハマ〉の考古学的な歴史は、一気に幕末へと移ります。

安政5年（1858年）、日本はアメリカとの修好通商条約を結びます。条約の規定によって近世横浜村は外国との窓口となる港として開かれます。これに伴って〈ヨコハマ〉の付根側には外国人居留地が設置され、1899年の条約改正によって廃止されるまで続きます。

居留地のあった山下町では、レンガ造りの建物の基礎などとともに、開国間もない日本へと渡ってきた外国人達が使った食器類などが残されていることが、発掘調査によって明らかとなっています。国際都市横浜の文字通りの礎は、〈ヨコハマ〉のどこかにまだ人知れずひっそりと眠っているのかもしれない。

終・浜の真砂まなぐいまは



縄文時代以来連続と続いてきた、砂丘・砂嘴と人間の歴史。刻々と変わり続ける地形を巧みに利用しながら、海砂と人間は共に生きてきました。

では現代はどうでしょうか。日本各地では土砂崩れや洪水を避けるために治山工事や河川工事がさかんに行われています。しかしこれによって海へ流れ出る土砂の量が少なくなり、浜は痩せ続けています。土砂の供給量の減少は海底の地形にも変化を起し、津波や高潮の危険性を向上させているとともに、棲息する魚種も変えてしまい漁業にも影響を与えています。

これから先の未来に向けて、私達は自然との付き合い方を今一度見つめ直さなければなりません。その土地が持つ歴史や性質を再び思い出すことにあるのではないのでしょうか。土に埋もれ砂に隠された先人たちからのメッセージを受け取り、それを将来に活かせるか否かは、私達の手にかかっています。

主要参考文献

- 石村 智 2017『よみがえる古代の港 古地形を復元する』歴史文化ライブラリー 455, 吉川弘文館
小田原市編 1995『小田原市史』別編城郭
神奈川県教育委員会(埋蔵文化財センター)編 2009『横浜開港の考古学』神奈川県教育委員会・愛川町教育委員会公益財団法人かながわ考古学財団 2016『「考古学から見る中世都市鎌倉の海浜地域」記録集』
鈴木隆介 1998『建設技術者のための地形図読解入門』第2巻低地, 古今書院
斎藤直子 1995「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」『中世東国の物流と都市』, 山川出版社
斎藤直子 1999「13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』81
田尾誠敏・荒井秀規 2017『古代神奈川の道と交通』藤沢市史ブックレット8, 藤沢市文書館
茅ヶ崎市社会教育課編 1996『平成7年度文化資料館特別展 湘南の低地遺跡 展示図録』
平塚市博物館市史編さん担当編 1999・2003『平塚市史』11上別編考古(1)・(2), 平塚市
藤沢市編 2009・2011・2014・2015『大地に刻まれた藤沢の歴史』II～V
横須賀市編 2010『新横須賀市史』別編考古

歌詞引用

「浜辺の歌」(1916年)
作詞:林古溪 作曲:成田為三
「むすんでひらいて」
(1947年)
作詞:不明 作曲:ルソー

図版引用文献

- 赤星直忠博士文化財資料館雨崎洞穴刊行会編 2015『雨崎洞穴』
香川・下寺尾遺跡群発掘調査団編 2005『香川・下寺尾遺跡群 北B地区・下寺尾廃寺地区・篠谷地区 発掘調査報告書』
構之内遺跡発掘調査団編 1994『構之内遺跡発掘調査報告書』, 三共株式会社
財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ財団編 2013『本村居村A遺跡(第6次) 本村居村B遺跡(第4次)』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告36
茅ヶ崎市教育委員会編 2014『木簡、語る。シンポジウム「居村木簡が語る古代の茅ヶ崎」資料集』
中村 勉 1994「「角」とよばれる釣針について—三浦半島出土の資料を中心として—」『考古学研究』第40巻第2号, 考古学研究会
浜諸磯遺跡調査団編 1998『浜諸磯遺跡—E地点発掘調査報告書—』
平塚市遺跡調査会編 1989『大原遺跡III』平塚市埋蔵文化財シリーズ10, 平塚市教育委員会
横須賀市教育委員会編 1987『蓼原 神明地区埋蔵文化財調査報告(1)』横須賀市文化財調査報告書第13集

地形想定復元図引用参考文献

- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧戸遺跡(逗子市 No.100) 発掘調査報告書』, (仮称) 医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所
上本進二・浅野哲哉 1998「藤沢低地の地形発達と遺跡形成」『神奈川県藤沢市若尾山(藤沢市 No.36) 遺跡—藤沢市 大道小学校内地点—発掘調査報告書』, 藤沢市大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団
上本進二・浅野哲哉 1999「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告』7, 茅ヶ崎市教育委員会
斎木秀雄 2009「材木座の潟湖(予察)」『鎌倉考古』No.35, 鎌倉考古学研究所
澤 祥・松島義章・澤 眞澄 1994「三浦半島平作川低地の完新世の古地理変遷」『第四紀研究』第33巻第2号, 日本第四紀学会
森 慎一・野崎 篤 2016「相模平野における縄文海進期以降の古地理の変遷」『平塚市博物館研究報告 自然と文化』39, 平塚市博物館
なお作成にあたっては、理解を平易にするため一部の細別分類を省略・統合している場合がある。
また地形分類図(現在)・地形図・色別標高図・航空写真については「地理院地図(電子国土WEB)」を利用した。

協力機関・協力者(敬称略)

- 青山学院大学考古学研究室・赤星直忠博士文化財資料館・天草市教育委員会・石川県埋蔵文化財センター・小田原城総合管理事務所・鎌倉市教育委員会・國學院大學博物館・国土交通省東京湾口航路事務所・逗子市教育委員会・茅ヶ崎市教育委員会・東京国立博物館・東京大学考古学研究室・東京大学常呂実習施設・羽咋市歴史民俗博物館・葉山しおさい博物館・平塚市教育委員会・藤沢市郷土歴史課・藤沢土木事務所なごさ港湾課・三浦市教育委員会・南種子町教育委員会・横須賀市教育委員会・横須賀市自然・人文博物館・横浜国立大学教育学部
石村 智・大村浩司・古田土俊一・杉山浩平・中村 勉・西川修一

5000	縄文時代	前期	II - ① 砂丘地帯へ、最初の一步
4000		中期	II - ② 浜辺に灯るキャンプの火
3000		後期	II - ③ 遠のく海への足
2000		晩期	II - ④ 拡がる砂原
1000			
500	弥生時代	前期	II - ⑤ 静寂の浜辺
B.C 1		中期	II - ⑥ 湘南砂丘民の誕生
A.D 1		後期	II - ⑦ 時代の夜宵に
100			
200			
300	古墳時代	前期	III - ① 君臨する砂丘王 III - ② まわる土器、めぐる人々
400		中期	III - ③ 埋もれた湾を臨む古墳
500		後期	III - ④ 海を見つめる埴輪 IV - ① 浜辺の死の世界死の空間
600			
700	奈良時代		III - ⑤ 消えた潟湖に埋もれた港 III - ⑥ 川の港 III - ⑦ 川と川とをつなぐ川 III - ⑧ うねる砂間にうえるイネ III - ⑨ 海のなりわい IV - ① 浜辺の死の世界・祀の空間
800	平安時代		
900			
1000			
1100			
1200	鎌倉時代		IV - ① 浜辺の死の世界・祀の空間 IV - ② 建ち並ぶ倉庫・職人 IV - ③ 中世鎌倉水族館 IV - ④ 海の彼方から浜の此方へ IV - ⑤ 和賀江嶋一港を埋めた港
1300	室町時代		
1400			
1500	戦国時代		
1600	安土		V - ① 砂の護り
1700	江戸時代		
1800			
1900	明治時代		V - ② 閉じる砂嘴、 開くYOKOHAMA
2000	大正時代 昭和時代 平成時代		

平成30年度 かながわの遺跡展

潮風と 砂の 考古学

発行日 平成30年11月22日
(平成31年2月28日PDF版改訂)

編集 神奈川県教育委員会教育局
生涯学習部文化遺産課
中村町駐在事務所
(神奈川県埋蔵文化財センター)

発行 神奈川県教育委員会
印刷 文一堂印刷(株)